

第 12 分科会報告（総合学習・生活科）

文責 村越含博（北海道文教大学）

事務局含めて 6 名が参加し、3 本のレポート報告・討議が行われた。

1. 「生活科・総合の授業はこうして」報告者：佐藤広也

佐藤さんは大学で生活科及び総合的学習の時間について自身の実践経験をもとに授業を行っている。

大学では学生の総合的な学習の時間の被教育体験を引き出しながら、その内容の薄さに加え、学生自身の批判的思考や探究していく視点の弱さがその結果見られると指摘する。その上で、「戦争遺跡や歴史的出来事の調査」「ザリガニを通してみる環境の問題」「昆布や水産業に関する授業」「地域探偵団としての小学校の校区調査」などを学生に潜らせながら、生徒の経験や受け止め方を考慮しながらも、教師の意識によって探究学習の質が大きく左右されることを提起した。

2 「のびる つながる たけのこプロジェクト」報告者：安中詩織

安中さんは、知的学級の 2 年生と 4 年生の男子 2 人を担任している。二人の子どもたちそれぞれの育ちの課題を丁寧に捉えながら、人との関わりを広げていこうと年度当初に指導方針を立てる。そのことを子どもたちにも対話を通して理解を求めながら、「たけのこプロジェクト」を年間の授業実践の柱に据える。このプロジェクトでは、子どもたちの興味関心に基づいて車やバスについて調べ学習を行い、地域の自動車整備工場やバス会社への見学も実施した。子どもたちは当初勉強嫌いだったが、プロジェクトを通じて学習意欲が高まり、自信をつけていく姿が報告された。現在は学んだことをカルタにまとめる活動を行っており、バザー行事での発表を目指している。一方、子どもたちによる地域の課題についての気づきをどのように発展させるか検討している。

3 「摩周メロンの栽培」報告者：斎藤鉄也

斎藤さんは 6 年生の担任として、総合的な学習の時間でメロン栽培に取り組んだ。学校では農業と観光業について個別にテーマを設定して調べ学習をし、発表会を行うことが決められているが、斎藤さんは、定式化された総合的な学習の時間をどう乗り越えるか検討し、担任する児童が農家であることをきっかけに、メロン栽培を総合的な学習の柱に据える。その中で斎藤さんは、メロン農家として協力してくれる農業者の生き方に触れさせたいというねらいを持った。児童たちは毎日の世話や温度管理など、メロン栽培の大変さを実感しつつ、また、地域のメロン栽培の歴史や背景について学び、なぜこの地域でメロンが栽培されるようになったのかまで地域の農家から聞き取る中で明らかにしていく。児童たちは収穫したメロンを使ってデザートも作り、この学習を通じて、児童たちは地域の特産品であるメロンについての理解を深めることができた。一方、斎藤さんは単なる調べ学習ではなく、メ

ロン栽培の体験を通して農業の実態や働く人の思いを感じ取らせようとしたものの、当初の目標通りにはいかなかったと課題点を提起した。この実践の背景には、職場づくりについて斎藤さんの実践への批判的な意見もあり、苦勞したことも語られた。

以上の報告を踏まえて次のような実践内容の方向性が見えてきた。

- ・佐藤実践は生活科総合の授業を教科の多面的な内容から深めていくための「教師の専門性」を大学教育から問う報告であったこと。
- ・安中実践は、個の育ちの課題を教育課程に織り込みながら、学習の内容を媒介して、子ども同士がやり取りをし、練り合って深めていく内容であったこと。
- ・斎藤実践は枠組みとして固定化された総合的な学習（コピペとまとめ学習）を乗り越えるための「本物の体験」を軸に、地域の農業者の生き方に迫ろうと挑戦した、「摩周メロン」の実践であったこと。

討議では、これらの報告を踏まえ、今日の総合・生活科の実践上の課題について、以下の視点が話題となった。

まず、総合学習は教科内容の「専門的な内容」をカリキュラムの視点から近づいていくものである。近年のように「教育内容」を問わず、「調べ方」「学び方」といった「方法」ばかり問うても、子どもの学習にはつながらず、例えば、「ウェッビングマップ」の実践が増えているが、そのマップも散漫に広がっているだけではないかという現状の指摘があった。

子どもや生徒が思いついてやっているから「素晴らしい」という教師の盲目的な肯定には一石を投じる必要がある。それは「現状の課題を乗り越える」ような新しい知見はそう簡単ではなく、「教師の専門性に賭けた問いかけ」「概念砕き」を要するものである。

総合的な学習の時間や教科学習において、教師の指導性や方向付けが欠如していることと関連する。生徒が個別に調べ学習をするだけで終わってしまい、全体での学び合いや教師の適切な介入が不足している現状がある。また、大学教育においても同様の問題が生じており、教員と学生の関係性の希薄化や、実践の蓄積が次世代に継承されていない点が懸念されており、教育現場全体で、学びの質を向上させるための取り組みが必要である。

分科会の参加者が少数ながらも実践報告が出され、丁寧に検討することができた。若手の参加者が3年連続で報告するなど、若い世代の育成も進んできた。一方で、分科会の参加者数や報告数の減少が課題となっており、来年はより多くの実践報告を組織できるよう努力することや、教科書や既存の内容から広げていく戦略的な提案の必要性についても指摘があった。

これらを踏まえ、教育研究運動としての対抗軸を作り、様々な立場の人々が手を取り合っ

て流れを作っていくことの重要性が確認された。